平成２９年度　甲町立甲佐小学校　学校便り

清　流

目指す学校像
子どもの笑顔が輝き
勢いのある学校

No. 25（H29. 10. 26発行）文責 校長 福田雅也

「本気」が「奇跡」をおこす

「本気」が「奇跡」をおこす。…これは常々私が思っていることです。実は、本校のある先生のこれまでの取組が、正にこれに当てはまるものだったので、今回はこのことについて書くことにしました。しかし、その実践そのものは、個人的な情報が入っているので残念ながら紹介できません。そこで、私がこのことを感じるきっかけとなった事柄を紹介します。

♪白い光の中に　山なみはもえて　はるかな空の果てまでも　君は飛び立つ♪

この歌詞。きっとお聞きになったことがある方が多いと思います。メロディーが浮かんでくるという方もいらっしゃるかもしれません。

この曲の曲名は「旅立ちの日に」というもので、現在は多くの小中学校の卒業式で歌われています。何度聞いても、詞の内容、メロディーともに美しく心を打たれる曲ですが、この曲の誕生に感動的なエピソードがあることを、以前はまったく知りませんでした。しかし、3年ほど前、この曲を作曲した坂本浩美先生（現姓高橋）の講演を聞かせていただく機会があり、そのことを初めて知ることができました。

坂本先生は、新任で埼玉県のある中学校に赴任されました。しかし、その中学校は、その当時かなり荒れた状態だったのです。その中学校の校長先生は、荒れた学校を良くするするために、教育目標の一つに「歌声の響く学校」を掲げ、生徒たちに合唱の機会を多く与えられました。音楽の教師であった坂本先生も校長先生の気持ちをしっかりと受け止め、反抗的な生徒に「本気」で向き合い頑張ったそうです。生徒たちは、最初こそ反抗的でしたが、坂本先生の粘り強い努力で心を開き、歌う楽しさを知り、コンクールで賞に輝くまでになったそうです。その結果、しだいに学校は明るくなっていったのだそうです。（実際には、もっと具体的で感動的な場面が多くあったのですが、この紙面では書ききれません。）

「歌声の響く学校」を目指して3年目の1991年2月下旬、坂本先生は「歌声の響く学校」の集大成として、「卒業する生徒たちのために、何か記念になる、世界にひとつしかないものを贈りたい」との思いから、曲を作るため、作詞を校長先生に依頼されました。その時は、「私にはそんなセンスはないから」と断られたそうですが、翌日、坂本先生の机の上に書き上げられた詞が置いてあったのです。その詞を見た坂本先生は、なんて素敵な言葉が散りばめられているんだと感激したのだそうです。すぐに、音楽室にこもり楽曲制作に取り組むと、旋律が湧き出るように思い浮かび、その日のうちにこの曲ができあがったのです。実際の楽曲制作に要した時間は15分程度だったということなので、校長先生の一晩での作詞とともに「奇跡」と言うしかないと思います。

できあがった曲は、最初はたった一度きり、「3年生を送る会」で教職員たちから卒業生に向けて歌うためのサプライズ曲のはずでしたが、その翌年からは生徒たちが歌うようになったそうです。初めて披露した年度をもって、校長先生は教師生活を定年退職されたため、校長先生自身が披露されたのはこれが最初で最後でした。

その後しばらくは、その中学校だけの合唱曲でしたが、まわりの小中学校でも使われるようになり、1998年頃までに全国の学校で歌われるようになりました。さらに、私は覚えていませんでしたが、2007年に「SMAP」がCMでこの曲を歌い、改めてこの曲の良さに注目が集まったそうです。

「奇跡」はそう簡単に起こるものではないのだと思います。この曲の誕生は、「本気」で子ども達と向き合った坂本先生、校長先生と、それに「本気」で応えた素晴らしい子どもたちとの、何ものにも代えがたい3年間があったからこそ起きた、簡単に起こるはずのない「奇跡」なのだと、心から思えます。